

## 第2回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2024年7月9日(火) 19時~20時30分
- ◇方法 Zoomによるオンライン方式
- ◇参加者 30名

- ◇実践報告 福岡市立小呂小中学校 枝広隆志先生 ほか小呂小中学校の先生方  
「小呂小中学校におけるESD」

### 【実践概要】

- 小呂島・・・周囲3.5km 人口150人 漁業が主要産業 病院なし 信号なし  
警察、郵便局、コンビニもなし  
福岡市姪浜港より船で65分 日に1~2往復の渡船も年間170日ほど欠航する  
最近漁業が不振、人口減少 → 島存続の危機
- 小呂小中学校・・・校地校舎一体型小中併設校 小学生8名、中学生4名、教職員18名  
最盛期は62名 → 学校存続の危機

⇒ 小呂小中学校の使命

「小呂島の持続的発展を願い、その主体となり  
行動する児童生徒を育成する教育」



小呂島を深く理解し、郷土小呂島を愛する

校長として、

- 1年目ー課題の把握 「課題解決の手段としてESDがふさわしい」
- 2年目ーESDの推進を学校経営方針の中に位置付ける
- 3年目ーテーマ研究でESDを研究していこう
- 4年目ーさらに組織的にESDを推進

### 漁業の不振

気候の変動

漁獲量の減少

島の経済状況  
の変化



### 人口の減少

島・学校の存続の危機

教育の質の確保



小呂島という地域を題材とした学習

- ・小学校では島のよさに着目した題材設定 5・6年では小呂島の発展に貢献する人に着目  
漁師カードを作成し、島の特産品の購入者に配布
- ・中学校では、島の課題に目を向け、それを解決する主体となるための取組  
島の人の話から 「昔は魚もよう獲れたけんね」「俺たちが子どもの頃は子どももいっぱいおった」  
島の代表者との意見交換会 島内清掃活動に参加 → ごみの多さに驚く  
「私たちがポスターをつくり島民に呼びかけます！ いっしょに行動しましょう！」  
離島振興に詳しい方に聞いてもらおう  
「小呂島の発展のために、こんなことをしたらいいと思っていますが、どうでしょうか？」  
「〇〇島でも同じような取組をしたけど、こんな問題点にぶつかったよ。」  
「〇〇島では、そのときこんな工夫をしたらうまくいったよ。」

学習した内容を発信するとともに、他の取組を聞き交流することで考えを深める場

「離島学校サミット」3年目 他離島での取組を知る 離島経済新聞社に協力を依頼

離島ならではの悩み、喜びを共有できる

気候も風土も産業構造も違う島の、多様な文化に寛容で柔軟な心を養う

4校に絞る・・・オンラインでも単発ではなく「顔の見える交流」にしたい

2022年—新潟県佐渡島、三重県神島、奄美大島の学校と交流

2023年—東京都利島、三重県神島、奄美大島の学校と交流

2024年—長崎県黒島、鹿児島県黒島、奄美大島の学校と交流

年間3回の交流 ①お互いの島を知ろう ②もっと仲良くなろう ③私たちの島のSDGs

この取組を持続可能なものにするには、

- ・参加希望の学校がすべて参加できる体制の確立
- ・専属事務局の開設
- ・すべての参加校が win-win の関係に

(今年度赴任してきた教員の話)

個人のESD推進では限界がある。学校経営方針にESDが位置づいていることで、学校全体でESDをやっている。自分にとっての大きな刺激にもなっている。学校行事など様々な教育活動をSDGsの17の目標を位置付けている。

(小呂小中3年目の養護教諭の話)

健康な生活を送ることのサポートとして、毎月子供向けの保健だよりを発行している。

「誰一人取り残さない」ために、関係機関と一緒に支援

(研究主任の話)

子どもたちの学びや行動が持続可能な社会づくりに向けてどうつながっているかが見えるように、カリキュラムマネジメントの表を作成し、教科間のつながりなども見えるようにしている。

(中学部教頭先生の話)

離島学校サミットの取組を通して、1年目、中学生自ら「自分たちが小呂島のためにできることは何だろうか?」と考えるようになった。2年目、だれもが来たいと思える島にするための清掃活動を続けた。3年目、きれいな小呂島を汚さない、守っていくために島民への啓発活動を行っている。それをサミットで発信、交流することで、学びが深まっていると思われる。

【子どもの変容、職員の変容、島民の変容】

- ・3年前と比べて、子どもの発言の中に「小呂島が」というものが増えてきた。「小呂島と同じだ」「小呂島とは〇〇が違う」など。
- ・福岡市主催の英語スピーチコンテストで「小呂島の紹介」を積極的に行った。
- ・行事にSDGsを位置付けているので、ねらいが明確になり、職員間での共通理解が図られている。
- ・行事、授業そのものが持続可能なものなのか、子どもを中心に据えたものになっているかという職員間での話が増えた。
- ・漁業の不振により自信を無くしかけている島民は多いが、ゲストティーチャーなどで学校にいろいろな人来てもらい、子どもたちと島の未来について一緒に話し合うことで、「島をよくしていこう」とする相乗効果が生まれているように感じる。

【質疑応答、意見交流】

Q.このような学校の取組、ESDの推進について、保護者や地域に対し、どのように伝えていったのか？

A.「小呂フェスタ」のような島民が多く集まるときに、子どもたちが学んだことを発信する場にしたり、考えたことを伝えたりする場にしたりした。

Q.サミットは離島以外でも、また大規模校でもやってもいいのでは？

A.6年生では、北海道の離島ではない学校とも交流したりしている。

Q.「日本離島振興協議会」というのがあって、そことコラボしてもいいのではないだろうか？

宗像の社領でもあるというなら、歴史ガイドツアーなんかもできて、子どもの活躍の場にもなる。

A.わくわくできるような取組で、そういうものができるといい。

Q.卒業生などOBの方の話を聞く機会などはあるのか？

A.島には高校がないので、中学卒業と同時に島外の高校へ進学する子どもが大半。そんな卒業生に「ようこそ先輩」として様々な話を聞く機会をもっている。

○福岡では高校入試が変わってきていて、小呂小中学校が取り組んでいるような、探究的な学びの中で自分の確たる考えをもったり、プレゼンしたりする能力が求められている。学力の捉えが変わってきていると言える。その意味でも、小呂小中のような取組は今後大事になってくると思われる。

○学校全体で、チームでいろんなことができるということ自体がうらやましく感じる。

Q.中学校、小学校5・6年以外の取組を教えてください。

A.3・4年生は、市内4校と毎週金曜日の朝の会でオンライン交流をしている。

Q.「自分事にする」ポイントを授業のどこに置いているか？

A.たとえば、毎時間の振り返りにSDGsと絡めて、今日学んだことはこれと関係があるということを明確にさせたりすることを繰り返し行っている。

○学校存続の危機、地域コミュニティの存続という視点でESDを進めているというところに、大きな価値と可能性が見える。この取組は、子どもたちのこれからの人生においても、とても大きな足跡になるはず。そんな島で育ったという財産になると思う。

○ESDは子どもの変容がいちばん問われるので、どこがどう変わったのか、なぜ変わったのかなど、しっかりとしたデータをもとに分析することで、この取組がより確かなものになると思う。その蓄積を図られてはどうか。